

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉にもある通り、秋の訪れを感じる日も増えてきたのではないだろうか。本年の秋のお彼岸は九月十九日から二十五日までです。すでにお墓参りを済ませたという人もいるのではないだろうか。

戦後七十九年となる本年。多くの人が犠牲となった沖縄の地において、家族を亡くした県民たちを励まし続けた人がいました。歯科医でありながら、琉球芸能の達人でもあった小那覇全孝氏です。小那覇舞天（ブーテン）という芸名に親しみがあるという人もいるでしょう。

小那覇氏は一八九七年に、沖縄本島北部の今帰仁村で生まれ育ちました。その後、歯科医を志した小那覇氏は、一九二〇年に進学のために上京します。沖縄出身であるがゆえの差別を受けるなど、辛く悔しい思いをしながら過ごす中で、浅草の大衆演芸に魅せられます。

一九二二年に沖縄に戻った小那覇氏は、本島中部の嘉手納町で歯科医院を開業しました。その傍ら、芝居小屋や演芸場に出演し、歌や漫談を披露して人気を博しました。敗戦後、小那覇氏は難民として嘉手納町から本島中部の石川市（現・うるま市）に移住しました。当時、人口が二千人ほどであった同地に設けられた民間人収容所（石川収容所）には、三万人を超える人々が収容されていたといえます。

同地において、小那覇氏は歯科医として働きつつ、夜は芸人として地域の民家へ三



秋の彼岸に祖先の足跡を辿り 命のつながり確かめよう

線を持参して訪問しました。家族の位牌に向かつて泣き暮らす人々の家を訪れては、「戦争を生き延びた者が泣き暮らしているは、死んだ者も浮かばれない。生き残った者が元気を出さなくてはどうか。命のお祝いをしよう」と呼びかけました。そして、住民とともに踊り、歌うことで人々を励ましていったのです。

その後、石川市では終戦後の県行政機関である「沖縄諮詢会」が設置され、小那覇氏は同機関の初代芸術課長に就任しました。小那覇氏の尽力もあり、終戦の年の瀬には演芸大会が開催されるなど、演芸の力で人々の心を潤し、勇気づけたのでした。

先の大戦では、日本人の軍人は約二百三十万人、市民は約八十万人が亡くなったといわれています。現在では、戦争を経験した人が少なくなってきましたが、祖父母など上の世代の人たちは、そうした戦禍を生き残り、私たちに命をつないでくれました。『万人幸福の葉』第十四条には、次のように記されています。

天から与えられた命、親からいただいた体、世界にたった一つのこの肉体だから、その前途にもえるような希望をもつのである。

お墓参りは、今ある命の源流に立ち返る貴重な機会だといえます。秋の彼岸に、祖先と向き合い、その足跡を知ることが、生きる活力を高めてくれることでしょう。日々せわしく生きる私たちですが、こうした機会に、少しでも自らの親祖先に思いを寄せてみてはいかがでしょうか。